

映画 「ボクは坊さん。」が 地域にもたらしたもの



栄福寺 住職
白川 密成 (今治市)

私の著作である『ボクは坊さん。』（ミシマ社刊）が昨年、映画化され俳優、伊藤淳史さん主演で全国公開されました。今年、三月一六日にはDVDも発売、レンタル開始され、さらに多くの方が目にする機会が増えそうです。「本を書く」という作業は、一人で、しかも部屋の中で作業が中心になります。しかし「映画」の制作、撮影は地元である愛媛の方々や、今治市民の皆さん、近所の玉川町の地域のみなさんを巻き込んで、どこか「お祭り」のような明るい雰囲気がありました。その大きな要素のひとつは、「地元エクストラ」として市民のべ約450

人もの人たちが、実際に映画に出演、参加したことでした。それによって「私の出た映画を観てねー」という気持ちが高まりました。また撮影スタッフや出演者に対して地元の皆さんが、炊き出しをしてくれるなど、都市の撮影にはあまりない暖かさに触れて、映画の撮影自体も非常に和やかなものでした。そして撮影ロケ地として地元の会社や居酒屋、バーなどでも行われ、その店主のみなさんや常連のみなさんも喜んでくださることが多かったです。その一連の動きの中で、普段はあまり顔を合わせない地域の人同士に会話がうまれたり、地元の場所をあらためて訪れるきっかけ作りにもなりました。

映画「ボクは坊さん。」は美しい愛媛の農村が舞台になっていて、とても静かな映画です。その場所を舞台にした映画を制作することで、地元の人たちから、「特に取り柄のない場所だと思っていただけだ、映画、映像を通してみると本当に美しかったし、誇りに思った。子供や孫にもみせたい」という声が何度か聞こえてきたことは、ありがたいことでした。風景や自然だけでなく、ささやかだけど丁寧な地域の人々の「生活」「営み」を地元の私たちが、うれしく自己確認できたことは意外な効果でした。そして、もちろんそれを観た他の地域に住む人たちが「こんな場所があるなら行ってみたい」と興味を持つてくださるといふ、外面、



ロケ地の中心となった今治市 栄福寺の境内を駆け抜ける主演の伊藤淳史 ©2015 映画「ボクは坊さん。」製作委員会

内面のサウンドイッチのような相乗効果があるように思います。
この映画の制作を通じて、映画には地元の行政が大きく係わることを知りました。撮影候補地と現場スタッフを繋いでくださった今治市のフィルムコミッションや観光協会、市役所観光課、地元支所のみなさんなどが、様々な面で動いてくださり、非常に心強い存在でした。またそれによって、行政のみなさんと、市民のみなさん、地元の組織（今回はお寺など）が、協力してひとつの物を作りあげること、今までにはない一体感、会話、意見交換が発生したように思います。そして純粋な地元の事業と違うことは、そ

ここに「映画スタッフ」という外部の目、存在があることです。それによって新しいアイデアや交流が生まれるのは、「映画」というプロジェクトの大きな利点ではないかと思えます。

この映画企画が初めてメディアで紹介されたのは、じつは地元新聞の「ロケ地の経済効果」という記事でした。映画の撮影が始まると、少なくとも人たちがしばらくロケ地に滞在するため、弁当屋さんなどの飲食業界、ホテルなどの宿泊業にとって、経済効果があるということでした。もちろんそこには、「あの俳優さんが来てくださった、喜んでくださった」といううれしさも見逃せませんし、



原作者の白川密成も、僧侶指導で撮影現場の多くに参加した。
©2015映画「ボクは坊さん。」製作委員会

それがずいぶん励みになっていることもあるようです。

映画の公開が近づくと原作者である私自身もテレビや新聞、雑誌などの取材に積極的に応えました。中には夕刊の見開き二ページを使って特集をしてくださった新聞もあったり、この映画を評価してくださった養老孟司さんと共にインタビュー記事が掲載されることもありました。

私が住職をつとめる栄福寺は、四国八十八ヶ所のお寺です。この場所は、四国の人たちが伝統的に守ってきた宗教的な存在でありながら、多くの四国以外に住む人たちが「四国を訪れるきっかけ」になっているのも事実です。その存在を未来に繋げ、さらに発展させるためには、今回のメディア周知を通じて、映画だけでなく四国遍路を知って頂く小さなきっかけを提供できたことも望外のよろこびでした。ちょうど今、この文章を書いている納経所でも、山形から来られた若い女性のお遍路さんが、「映画に背中を押されて、元々興味のあったお遍路さんをしてみることにしたんです」と声をかけてくれました。

ある農産物の直販所の方とお話する機会があった時、「今回の撮影で今治を訪れた俳優さんが、今治の野菜を気に入ってください、今でも注文して下さるんです」というエピソードを聞かせてくれました。今まで書いてきたことや、

それがずいぶん励みになっていることもあるようです。

映画の公開が近づくと原作者である私自身もテレビや新聞、雑誌などの取材に積極的に応えました。中には夕刊の見開き二ページを使って特集をしてくださった新聞もあったり、この映画を評価してくださった養老孟司さんと共にインタビュー記事が掲載されることもありました。

私が住職をつとめる栄福寺は、四国八十八ヶ所のお寺です。この場所は、四国の人たちが伝統的に守ってきた宗教的な存在でありながら、多くの四国以外に住む人たちが「四国を訪れるきっかけ」になっているのも事実です。その存在を未来に繋げ、さらに発展させるためには、今回のメディア周知を通じて、映画だけでなく四国遍路を知って頂く小さなきっかけを提供できたことも望外のよろこびでした。ちょうど今、この文章を書いている納経所でも、山形から来られた若い女性のお遍路さんが、「映画に背中を押されて、元々興味のあったお遍路さんをしてみることにしたんです」と声をかけてくれました。

ある農産物の直販所の方とお話する機会があった時、「今回の撮影で今治を訪れた俳優さんが、今治の野菜を気に入ってください、今でも注文して下さるんです」というエピソードを聞かせてくれました。今まで書いてきたことや、



ロケ地の多くは地元の今治市で行われ、多くの市民工キストラが参加した。 ©2015映画「ボクは坊さん。」製作委員会

そのエピソードに現れているように、映画の撮影は、地元の地域社会にとっても、様々な出来事を運んでくれました。

私自身も僧侶役の所作指導のために多くの時間を撮影現場で過ごしましたが、俳優陣、撮影スタッフが、どのようにプロの技術を発揮しているか、そのことを肌感覚で実感し刺激を受けたことも大きな経験でした。それが私だけに留まらず、地域の人たち、特に若い人たちにとってもそうであると思います。そういった「数値化できないこと」から受けたポジティブな贈りものも、今回の映画が私たち地域社会にもたらしてくれたものだと感じています。